



立  
読み  
版

死霊狩り①  
ZOMBIE HUNTER

平井和正 Kazumasa Hirai



## 目次

第一章 選別

第二章 生存試験

第三章 最終試験

第四章 死ゾンビ霊

第五章 死闘

解説

あとがきをちよっぴり

## 第一章 選別

TWAのダグラスDC8定期便は、ローマで給油を受け、アテネへ向けて飛行を続けていた。

高度二万七〇〇〇フィート。酷寒の成層圏にあつて、華麗な赤と青の航空灯を点滅させ、希薄な大気を切り裂いて飛ぶ、巨大な機体の内部はのどかな別天地であつた。

客席に響いてくる単調なジェット音が、快い眠気を誘い、乗客の多くは、シートの背もたれを深く倒し、くつろいでいた。膝を備品の毛布でくるみ、鼾をかいている乗客もいる。百四十人乗りのDC8は、ほぼ満席であつた。

TWA機が、南イタリア上空にさしかかったとき、機内に異変が生じた。

四名の乗客が客席を立つと、それぞれの手にシユマイザ―短機関銃が現われたのだ。銃口は乗客に向けられていた。機内がにわかに騒然と湧きたつた。ハイジャックである。四名のうち、ひとりが女だつた。いずれもアラブ系の浅黒い肌、暗色の頭髪だ。精悍な顔にはめこまれた目が、刃物じみた物騒な光りかたをしていた。気迫に押されて客席が静まりかえる。本物のハイジャックだ。どうやって嚴重

な警戒をかくぐり、短機関銃を持ちこんできたのか。

四名のうち男女ふたりが、機首に近い一等ラウンジのドアを開け、足を踏み入れた。

悲鳴を漏らして腰を浮かすふたりのスチュワデスに短機関銃を突きつける。

死を秘めた無気味な銃口を見おろすスチュワデスの目は恐怖に輝いた。大きく見開かれ、虹彩こうさいの上下に白い隙間すきまがのぞいた。

銃口で、隆起した制服の胸を押されるままに、声もなく椅子に腰を落した。

女はさらに通路を進み、操縦室のドアに達した。不時の事故に備えてドアは閉鎖されているが、女はスチュワデスからキーを奪っている。

一等ラウンジに残った、鷹たかのように鋭い横顔を持ったアラブ人はまだ少年のように若い。だが、手にしたシユマイザーは、そんなことを忘れさせるほどの威嚇力があつた。一見して短機関銃とわかるシユマイザーのスタイルは実に凶悪である。

乗客たちは息を呑のんで身体を硬こわばらせ、身じろぎをする者もない。もつとも、なにも知らずに平和に眠りこんでいる乗客の方が多かったが。

操縦室のドアが開いたとき、パイロット・副パイロット・機関士・スチュワードの四人は、いっせいに女を振り向き唾然あぜんとした。

女が、高級ファッション・モデルそのけの垢<sup>あかぬ</sup>抜けた美人だったからだ。みごとに着こなしたファンシイ・スーツと凶悪な短機関銃との対照があまりにも異様であった。

手入れのいい美しい手が、がっしりとシユマイザーを支えている。銃器を身体の一部にまで馴染<sup>なじ</sup>ませた、プロフェッショナルの手つきであった。

「動くな。命令通りにすれば射たない」

女は英語で命じた。命令することに慣れている者の権威が身についた声音だ。

が、呆然<sup>ぼうぜん</sup>自失からまださめないスチュワードが反射的に動いた。すかさずシユマイザーが一閃<sup>いっせん</sup>し、スチュワードは鋼鉄の銃身に頭を割られて床にのめった。

美貌からは想像もつかぬ、獰猛<sup>どうもう</sup>きわまるシャープな動きであった。ファッション・モデルに見えようとも、鍛えぬかれた暴力のプロであることを実証した。

美女は冷笑をパイロットたちに向け、左手で機内放送用マイクを壁のフックからはずした。その間、右手で支えたシユマイザーはピリツとも動かない。

「全乗客、及び乗務員に告ぐ……」

やや仏語なまりのある鼻にかかった英語で、美女はマイクに語りかけた。

「私は、この飛行機の新しい機長である。パレスチナ解放人民戦線といえはおわかりであろう。パレスチナ人を虐殺し、迫害を加えたことに対し、重大な責任を有するイスラ

エル人乗客を逮捕するため、われわれはこの飛行機の乗つとりを行なうものである」

機内放送が流れるにつれ、乗客の動揺は高まった。押し殺した悲鳴や呻き声うめが洩もれる。

ユダヤ国家イスラエルと確執をかまえるアラブゲリラの襲撃であつた。数千年来の、両民族の血で血を洗う抗争がTWA機を突如巻きこんだのだ。

二千年にわたる辛苦の放浪の果て、さまよえるユダヤ民族は、パレスチナに祖国イスラエル再興の悲願を実現させた。

パレスチナは、回教ユダヤ教両宗徒の共通の聖地であるのみならず、アラブ世界最高の肥沃ひよくの地なのである。アラブ世界がパレスチナ奪還をめざして大同団結したのも無理からぬことであつた。人種・宗教をめぐつて確執の根は深く、とりわけパレスチナを追われた難民を主体とするアラブゲリラの闘争意欲は激烈をきわめた。

ゲリラ分子の破壊活動は凶悪化の一途をたどり、イスラエルに友好的な他国の航空施設にまで及んでいた。

過激ゲリラの意図は、険悪な中東情勢に大胆なテロ活動を加えて、さらに火勢をあおろうとするものであつた。アラブ世界全体を戦乱の泥沼にひきこみ、イスラエルを最終的に中東地図から抹殺するのだ。

「抵抗する者は容赦なく射殺するが、おとなしくしていさえすれば、だれにも危害は加えないと約束する。なお、当

機はダマスカスに強制連行する」

話の内容がわからなければ、魅力的な女声アナウンスと  
思っただであらう。

「乗客のうちイスラエル国籍の者は席を立ち、隊員の指示  
に従うように。ダマスカス着陸後、パレスチナ解放人民戦  
線により身柄を拘束されるが、罪状を審問の上、無罪の場  
合は釈放することを約束します。無益な抵抗はとりかえし  
のつかぬ重大事態を招くことを忘れぬようにしなさい」

不安げに数名の乗客が席を立った。ゲリラ隊員の短機関  
銃の銃口を向けられ、蒼白そうはくになって両手を肩まで持ちあげ  
る。

だが、典型的なユダヤ系の黒っぽい髪と鷲鼻わしななを持ちなが  
ら、アナウンスの指示に従わない乗客がひとりいた。

茶色の口髭くちひげをたくわえた顔は鉛色になり、冷汗で濡れそ  
ぼった。このままゲリラの手に落ちたら生命がないと知り  
つくしているからだ。パレスチナゲリラに暴虐を働い  
たイスラエル人は徹底的な報復を免れない。生殖器をもぎ  
とられ、なぶり殺しにされる。

肩に動きをあらわさないように慎重に這はわせた指先が、  
服の下に隠した二十二口径自動拳銃の感触を探りあててい  
た。決意はさだまった。しそんじたときは、乗客乗務員百  
四十人を道連れにするまでだ。たったいま行動に出なけれ  
ば死は確実だからだ。

軽く鋭い銃声のはじめ、アラブゲリラの褐色の首から血

の噴流が奔ほとばしった。死体が通路に倒れるより早く、もうひとりのアラブ人のシユマイザーが炎の舌なめずりをはじめた。

口髭のイスラエル人は拳銃の名手だった。間髪を入れず射ちつぎ、残るアラブゲリラの額にポツンと青い孔をあけていた。が、ちっぽけな二十二口径弾にはパンチが欠けていた。一発で相手を叩きつけ吹っ飛ばす決定的な破壊力を持たなかった。

ゲリラは朦朧もつろうと目の焦点を失いながらも、短機関銃の弾丸を四方にばらまいた。マシンピストル用に火薬を増量された九ミリ・ルガー弾は、やすやすと座席ごと乗客の肉体を射ち抜き、肉塊と血飛沫ししぶきをとびちらせ、頑丈な二重構造の機窓を薄紙のように貫通した。

たちまち恐ろしい唸うなりが耳をつんざいた。成層圏における与圧式航空機の機体の内外にはたいへんな気圧差がある。機窓が破れたことよって爆発的な気流が機内に生じた。

手近の手荷物や毛布が宙に浮き、疾風に巻きこまれ、矢のように破れた機窓へ走った。ひしめきあいながら次々に吸いだされ暗黒の虚空へ消える。ついで悲鳴をあげもがきながらシートをはなれた人体が吸い寄せられて行く。

激動が機体を襲った。バランスを失ったダグラスDC8は急激に機首を傾けた。機内圧の激変のため、乗客の鼻や口から鮮血が噴きだした。鼓膜が破れ、眼球が突出する。

操縦室では乱闘になっていた。機体の動揺に乗じて、機

関士が女性ゲリラを襲ったのだ。

赤ら顔の筋骨逞たくましい機関士は物凄い形相で女をねじ伏せ、短機関銃を奪いとろうと努めていた。だが、ほっそりした美女の肉体は、信じがたい馬力を秘めていたのである。その筋力は大男の機関士に劣らなかつた。呻くような罵声ばせいをもらしつつ、傾斜した操縦室の床で格闘する。

シユマイザーが暴発したのはそのときだ。副パイロットは頭部を半分も吹き飛ばされて即死した。機長の右肩に穴があいた。操縦桿を握りしめたまま、がくつと頭が垂れさがった。さらに弾丸はパネルに並ぶおびただしい計器のいくつかを粉碎した。

かろうじて一等ラウンジから操縦室にたどりついたゲリラの若者が、女にのしかかり首を絞めている機関士の頭部に、短機関銃の銃身で凄<sup>ひ</sup>い強打を加えた。三撃目に頭蓋骨ずがいこつの破片が毛髪をつけたまま飛ぶ。

「パイロットが……」

重い機関士の死骸しがいの下から、女がしゃがれ声を絞り出した。

「パイロットが、やられた……」

若者の顔がショックに歪ゆがみ、土気色に変じた。機長の肩口から脈搏うつて血が飛んでいる。

「不時着だ！」

若者は機長の耳に口を寄せ、切迫した大声で喚わめきたてた。「どこでもいい、飛行機をおろせ。不時着させるんだ。お

い、パイロット、できるか?!

「わかった……やってみる……」

激痛に耐える機長の顔は無残にねじまがっていた。脂汗が滝のように流れる。

「手を……手を貸してくれたら……」

「たのむ! 頑張ってくれ」

若者は急迫した死に怯えきっていた。虚勢のすべてが剥げ落ち、年齢相応の少年の泣き顔になっていた。

「死ぬな、死ぬんじゃないぜ」

おろおろ声で叫ぶ。

「いけない! 不時着なんかしたら承知しないよ!」

死骸をようやく押しつけた女が床からどなった。

「ダマスカスへ行くのよ!」

「馬鹿な、パイロットはくたばりかけてるんだ。ダマスカスまで二時間もかかる。こいつがそんなに保つもんか。早く不時着しないと死んじゃう!」

若者は金切声で絶叫していた。もうゲリラ決死隊員の誇りも勇気も消しとんでいる。たすかりたい一心だ。全身、鳥肌立っている。

「パイロットがくたばったらどうなる?! 墜落だ! 墜落して、みんな木っ端微塵になるんだ。俺はいやだ! 死にたくない!」

「上官の命令が聞けないというのかい、アリ・ムハマッド・アミン」

と、身を起した美女がゆっくりいった。喉のどを痛めつけられたため、老婆のようにしゃがれ声であった。その手は機関士の死骸の下敷きになった短機関銃をひきずり出した。

「冗談じゃねえや！　こんなときに上官もへったくれもあるかい」

「アリ！」

女は鋭く激しい声を出した。少年はみじめな泣き笑いの表情を女に向けた。

「な、不時着しなきゃ、あんたも俺もバラバラになってちぎれ飛ぶんだぜ。たのむから、わかつてくれよ……」

言葉がとぎれ、大きく目がみひらかれた。女の握ったシユマイザーが、少年の胸板をまともに睨にらんでいた。

「ライラ！」

愕然がくぜんとして口ごもった。

「まさか、俺を……弟の俺を殺しやしないなライラ……俺はまだ若いんだ、ほんの子どもなんだ……俺を死なせやしないな、そうだろ？」

おずおずと笑いかけた。

「俺は、あんたにいわれて参加したんだぜ。隊長は、まだ若すぎるといったのに、あんたが……」

「私は臆病おくびょうな犬を弟に持ったおぼえはない。私の可愛かわいい弟、アリ・ムハマッド・アミンはパレスチナ解放のために生命いのちを献さげ、雄々さかしく戦死した……」

女は呟つぶやいた。

「上官不服従及び敵前逃亡と認め、即刻処刑を行なう。イ  
ル・アラール！」

短機関銃が短く咳きこみ、少年の胸腹をひき裂き、内臓  
をとびちらせた。

部下であると同時に実弟の少年を射殺した女の目は物凄  
く光っていた。

「ダマスカスへ行くんだ」

と、無気味な老婆の声で命じる。

「不時着なんかしたら、パイロット、おまえも殺す」

「わかった……あなたには百四十名の乗客の生命も、もの  
の数でないんだな……」

機長は喘ぎ、咳きこみ、血の混った唾を吐いた。出血の  
ため指先まで白くなっている。

「あなたは、恐ろしい女だ……弟まで平気で殺したのか

……

「無駄口を叩くな。手当をしてやるから、操縦に全力を集

中するがいい」

「よくわかった……いわれた通りにする。乗客の生命がか  
かっているからな……救急セットにモルヒネがある。とっ  
てくれ……」

劇痛に耐えかねて、パイロットは呻きだした。

「飛べ、ダマスカスへ」

女はいった。

しかし、強奪されたTWA機は、ダマスカス空港で着陸に失敗した。機体は大破炎上し、乗客乗員百四十六名のうち、救出された生存者は、わずか七名だけであった。

\*

IBMコンピュータのディスプレイ・ユニットに、やや太めの万年筆に似て、尻しりからコードをひきずったライト・ペンが近寄って行った。

スクリーンには、数字が行列をつくっている。

若い女の技オペレーター師がライト・ペンの尖端せんたんを、数字のひとつに当てると、一瞬画面が空白化し、ついですばらしい美貌の女の映像がスクリーンを占めた。

極秘 ZOM1 / 1 / 345 / 546 / 7889 / 19  
/ 9118 / オメガ107

氏名・ライラ・アミン / 性別・女 / 年齢・二十二歳 / グ  
ループ・軍人 / パレスチナ民族解放戦線における階級は大尉……

コンピュータが、資料をテレプリンターにすごい速さで打ちだしてよこす。

ベイルートPL病院において入院加療中」驚異的な回復力を示している」

評価・A級

巨大な執務デスクを前にすわるその男は、石像に似た頭部を持つ初老の人物であった。おそろしく冷徹な雰囲気を身辺に漂わせていた。無言ですわっているだけで、室温を低下させるような印象だ。

濃い黒色のサングラスが両眼を覆っているが、北極圏の氷原のように冷たい瞳ひとみが容易に想像できる。

「オペレーター。ナンバー一一八を」

冷やかな声であった。コンピュータの合成音声にも増して、感情の欠如したおよそ人間味のない声の響きだ。

「YES SIR」

若い女技師が答えた。もう六か月にもなるというのに、ボスは決して部下の名を呼ぼうとしない。いつも決まって、オペレーター、だ。きっと自分のことを、コンピュータの可動部分だとも思っているのだろう。

というより、ボス自身、人間の形をしたコンピュータみたいだ。血が通っている人間とはとても思えぬほど冷やかなのだ。

技師の若い女は、ほっそりした肢体と美しい乳房を備えた自分に、一顧の関心もしめさないボスに対して、悪意を感じるくらいだった。故意に挑発的なポーズをとってみて

も、ボスは微動だにしないのだ。

ひよつとすると、濃いサングラスの下の両眼は盲目なのかもしれない……

「早く。オペレーター」

と、初老の男が冷ややかにうながす。娘はブロンドの髪のとれかかった肩をすくめ、操作鍵キに触れて、美女の映像を消し、再び数字の行列をスクリーンに呼び戻した。

「次、ナンバー一八です」

と、オペレーターがいった。

\*

沖縄の米軍基地の町、コザ市で千名に及ぶ白人兵と黒人兵の大規模な衝突が生じた。

ナイフ、ブラス・ナックル、棍棒、拳銃等の凶器によって大乱戦が行なわれ、大量の死傷者が続出した。

表向きは、人種差別がないと称している米軍内部でも、その実、白と黒の憎みあいは熾烈しれつであり、きっかけがあればたやすく爆発するのだ。

サイレンと銃声がけたたましく鳴り響く中、シャッターを固く閉めきつた商店街を戦場に、事態は市街戦の様相を呈してきた。

駆けつけた警察車がひっくり返され、火を放たれて炎上する。荒れ狂う暴徒に対して、沖縄の警官隊はまったく手

を出さない。巻き添えを食うことを恐れて、はじめから逃げ腰だからだ。

その精悍な黒人兵は、凶暴さにかけてはひとときわ群を抜いていた。残忍な薄笑いを浮かべながら暴れまくる。血だるまになって敗走する白人兵の背中をナイフでえぐり、すでに戦闘力を失い路上に転がっている白人兵の頭を容赦なく蹴り潰す。破壊欲の化身、まさに血に狂った黒豹である。

鎮圧に出動した米憲兵隊に対しても、黒人兵を指揮して、猛烈な逆襲に出た。

炎上するパトカーの血のように赤黒い炎に照らしだされ、怒号する顔は、なにか原始的で奇怪な凶々しい魔人像を想わせる。

ついに、戦車が出動するに及んで、ようやく大暴動は鎮圧された。

その黒人は、米海兵隊二等兵で、不死身のウィリーと呼ばれていた。まさに不死身と呼ばれるにふさわしい男であった。暴動が果てたあと、胴体に五発の弾丸をぶちこまれながら、しぶとく生きのびていたからだ。

「評価・A級」

と、コンピュータが回答する。

ナンバー一八ノウィリアム・ホフマン。アメリカ合衆国の超過激派黒人団体 黒豹党 の重要メンバーである。

ブラック・パンサー国防次官という肩書の持主だ。

米軍に潜入し、上官への命令不服従や白人兵士との間の非協調、対立を激化させるべく、黒人兵士を扇動するのが、ウィリアム・ホフマンの任務であった。

「オペレーター。ナンバー一三六を」と、黒いサングラスの人物が命じた。

\*

ナンバー一三六／林石隆。

中国保安省に属する破壊工作のエキスパートである。

その悪運の日、林グループが襲撃したのは、日本最大の兵器産業、豊田工業の工場であった。部下七名とともに、二か月がかりで地下トンネルを掘り抜き、工場内へ侵入を計ったのだ。

林グループの目的は、豊田工業が生産管理のため採用しているコンピュータ・システムの攪乱かくらんであった。テープ・ライブラリに納まっている、データを記録した磁気テープのすり変えだ。

その結果は、たちまち豊田工業の生産管理の大混乱を生み、不良製品の大量生産を招くであろう。当然、自衛隊への新鋭火器類の納品予定は大きく狂い、国防計画に重大な支障をもたらす。

そればかりでなくタイや南ベトナムなど、中国に近接した非共産諸国向けの兵器輸出も停止しなければならなくなってしまう。

日本の兵器産業は、国際的に信用を失墜し、大打撃をこうむる。狂ったコンピュータの惹きおこす混乱を收拾するには、たつぷり一年以上を必要とするであろう。

いうまでもなく、これらの事態は、日本の戦力強大化を嫌う中国にとつては大きな利益である。

ところが、林グループの破壊工作プランは、買収したはずの計数情報センターの係員の裏切りによつて、事前に察知されていて、武装警備員の待ち伏せをくつたのだ。

林グループは、嘔吐ガスの煙幕を張って応戦しながら、地下トンネルへ逃げ戻った。林は部下たちを逃走させるべく、みずから<sup>おとり</sup>囚となつて地下トンネルと逆方向に逃げ、追手の注意をそらそうと試みた。追手をさんざ<sup>ほんろう</sup>翻弄してから再び地下トンネルへ戻り、脱出しようという企てだったが、林グループは徹底的にツキに見放されていたらしい。嘔吐ガスにやられた警備員が、苦しまぎれに盲射した自動小銃弾が、林の部下の持つていた爆薬に偶然命中したのである。

部下の全員が肉片と化して吹つとび、地下トンネルは土砂で埋つて、林は退路を断たれてしまった。

警備側の繰りだした獰猛なブラッド・ハウンド犬四頭を殺戮し、工場の丈高いコンクリート塀をよじ登った。そこ

で、ついに林石隆のなけなしの幸運も尽きた。

身体に数発被弾していたため、さすがの林も目測を誤まり、二万ボルトの電流柵に接触してしまったのだ。林はバツトに弾はじかれたボールさながら吹きとばされ、転落した。そして意識不明のまま捕えられたのだ。

強烈な嘔吐ガスの立ちこめる中を、ガスマスクもつけず平然と活動したこと、二万ボルトの電撃にも耐えたことなどから、林石隆の超人的な特異体質は明らかであった。この中国人なら、電気椅子にすわらされても平気で生き伸びるであろう。

極秘裡りに、林石隆の身柄は在日米軍に引渡され、未遂に終わった破壊工作も闇やみから闇へ葬られた。

公表することによって、日本の兵器産業をクローズアップさせ、反戦世論をかきたてるのは好ましくないと判断されたからである。

\*

ナンバー三五八ノ田村俊夫。たむらとしお

二十三歳のプロ・レーシング・ドライヴァーだ。

その日、俊夫の顔のギプスがはずされようとしていた。

エジプト・ミイラさながらに顔面を覆った包帯に、看護婦がテキパキとハサミを入れて行く。

ふたりの若い女が、食いいるような視線を看護婦の手許

に注いでいる。年長の方が、俊夫の姉の田村由紀子だ。憂いをおびた、淋しい美貌の持主である。若い娘は俊夫の恋人のジャンジーラ牧口　ブラジル三世の混血娘だ。ポルトガル系のラテンの血が混った情熱的な美少女だ。

「これでやっとギプスとさよならできる」

と、俊夫が呟いた。

「痒くて気が狂いそうだった」

「しっ、黙って」

看護婦が叱りつけた。

ジャンジーラは、ごくりと唾をのんだ。両手は握りしめられ、祈りをこめて喉許に当てられていた。緊張のあまり、いまにも叫びだしそうな表情だ。

「ごそりとギプスがはずされた。嘆声が娘たちの唇を漏れた。

「おめでとう、手術は成功したよ」

と、医師が肩の力をぬいていった。俊夫は看護婦から手鏡を受けとって、貪るようにおのれの顔に見入った。

「本当だ。どんなひどい顔になったかと心配してたが、元通りだ……」

「美容整形術の進歩に感謝するんだね。例の事故で、君の顔はグシャグシャに潰れてしまった。骨の破片を拾い集め、なんとか顔を造り直したんだ。大手術だった……」

「ほんと、前よりハンサムになったくらい」  
と、看護婦も口を添える。

「それにしても、君の超人的な回復力には恐れ入ったよ。なにしろ、背骨が折れ、骨盤が割れ、折れた肋骨が五本も肺に突き刺さっていた……内臓も滅茶苦茶にねじれていて、内出血がひどかった。どんな医者が診ても、一目でこれはもうだめだと見放したろう。それを、よくぞここまで持ち直したもんだ。まったく、殺しても死なない人間とは、君のことをいうらしいな」

「どうやら、僕は不死身らしいんでね」

俊夫はにやりと笑おうとしたが、さすがに顔面筋肉が錆びついていて、思うにまかせない。

「子どものころから、生命にかかわるような大怪我を何度もしてきたんです。さすがに、今度の事故ばかりは、もうだめかと思っただが……おかげで、またレース界に復帰できます」

「これだけひどい目にあっても、まだレーサーを続ける気かね？」

医師は驚きの表情を浮かべた。

「あたりまえですよ。レーシング・ドライヴァーと怪我とは切っても切れない仲でね。グラハム・ヒルをはじめ、事故で負傷して再起不能といわれながら、カムバックした一流レーサーは数えきれないほどです」

俊夫が昂然こうぜんという。

田村俊夫は、東和自動車工ファクトリー場チームの猛虎タイガーと呼ばれた、不世出のレーシング・ドライヴァーであった。

一か月前の日本G Pで、不運な事故に見舞われなければ、優勝は彼的手中にあつたらう。

優勝を目前にした最後の一周で、俊夫は大事故を起こしたのだ。マシンは完全にクラッシュし、バラバラになつて吹つとんでしまった。俊夫が生命をとりとめたのは、奇跡といつてもよかつた。並みの人間だつたら即死していたかもしれない。俊夫の人間ばなれした体力が、死の淵ふちから彼自身を引戻したのだ。

「再起不能だなんて、新聞や雑誌にさんざん書きたてられたらしいが、いまにきつと鼻をあかしてやりますよ」

俊夫は、白い強靱きょうじんな歯をのぞかせて、ぎこちなく笑つた。由紀子とジャンジーラに、まばらに髭ののびた青白い顔を振り向ける。

「心配ないさ。じきに元通りカムバックしてみせるからな」

「トシオ！」

ジャンジーラは、弾かれたようにベッドの俊夫に走り寄り、彼の顔中にキスを浴びせかけた。

「心配したわ。とても心配したわ。でもよかつた。これでもなにもかも元通りなのね」

ブラジル人であるジャンジーラは、人前でも情熱の表現をはばからない。看護婦が顔を赤らめて目をそらせるほどだつた。

ジャンジーラの開放的な喜びとは対照的に、由紀子の顔

には憂悶の色が滲んでいた。彼女には、喜びに浸りきれない心のわだかまりがあつたのである。

俊夫はなにも知らなかつたが、このとき、東和自動車はすでに、彼の解雇を決定済みだつたのだ。

退院まぎわに、姉からその事実を知らされた俊夫は憤怒で蒼白になり、荒れ狂つた。

「なぜだ。なぜおれをクビにするんだ。事故は俺の責任じゃないんだぞ。ハンドルのピンが折れたからだ。明らかにメカニツクの責任じゃないか」

東和自動車のいい分は、一方的で理不尽きわまるものであつた。俊夫のレーサーとしての技倆はさておき、テクニツクが荒すぎるために事故が多すぎるのみならず、協調性に欠ける性格から、チームの和を乱すというのだった。

「馬鹿にしやがつて！」

俊夫は怒りに慄えた。東和自動車の誇るタイガーとさんざん持ちあげて利用しておきながら、再起不能と見ると、手の平返したように冷酷無残な素顔を剥きだしにする。クラッシュした車をスクラップ処分するのと同じ扱いだ。

入院中、会社側から一度も見舞いに来なかつたわけがわかつた。

退院を許され、松葉杖を突いて自宅に戻つたが、心は晴れない。憤懣ではらわたを灼かれてるようだ。

こうなつたら、石にかじりついてでもカムバックし、非情な会社を見返してやる。

が、いまだだちにマシンに乗ることは不可能だった。まだ身体は本復していない。

俊夫は焦った。莫大なものについた手術代や入院費で、持ち金を使い果し、多額の借金まで残る始末だ。

会社の正社員ではなく、一介の契約レーサーにすぎない俊夫には、事故を起こしてもなんの保証もない。日本の職業レーサーは、専制時代の農奴並みに扱われている。消耗品だから、使いすてである。

退院後、雀すずめの涙に等しい会社からの見舞金を持ってきた工場チームの監督の戸田に、俊夫は金を叩き返した。

「ふざけないでもらおう。俺もタイガーと呼ばれた男だ。身体は傷ついても、誇りまでは傷ついていないぜ」

俊夫は怒気を露わにしていた。

「しかし、誇りといっても、その身体では思うようになるまい。とにかく、この金を納めておいてはどうかね？」

戸田は嘲あざけりをこめて、俊夫の松葉杖をわざとらしく眺めた。全盛時代の俊夫の我儘わがままぶりを快く思っていないかった戸田は、俊夫の没落に、復讐の快感を味わっているようだった。

「ま、焦らず急がず、じっくりと再起の機会を狙うことだ。私も大いに期待しているよ」

鼻の先で笑う。それが俊夫を逆上させた。

「事故の原因が、車の欠陥だったことを暴露してやる。いか、このままじゃすまさないから……」

「あいにくだが、とつくに事故原因は究明済みだ。操縦ミスという結論が公表されている。新聞や雑誌を読まなかったのかね？ もっとも、病気のベッドで生死の境いにいたんだから無理もなかるうが……」

「畜生！ 事故の責任を俺ひとりに押しつける気か」

「まあ、無駄だから、あまり騒ぎたてんことだな。頭を冷やしてよく考えてみたらどうだ。東和自動車を相手に、喧嘩けんかしてみたところで、どうにもならんとわかるだろう」

「帰れ。キツネ野郎」

俊夫の目は、怒った野獣のように光った。暴力の欲望で、満身の筋肉がふくれあがる。

「歯を喉の奥に叩きこんでやる」

戸田は顔色を失い、逃げ走るように退散した。俊夫の腕節の強さには定評があった。以前、ナイトクラブでからんできたボクサー崩れのヤクザを、俊夫が鮮やかに蹴り倒したことがあってからだ。海外遠征で、刃物を抜いてかかってくるフランス人の与太者どもを、素手で追い散らしたこともある。俊夫は、一度暴れだすと、豹の獰猛さを発揮する。

「身の程知らずの若造が」

戸田は、足の不自由な俊夫が追って来ないと見てとると、戸口の外で捨てぜりふを喚きたてた。

「だれも貴様ごときを相手にするもんか。泣面を搔かくな」

戸田の言葉は正しかった。俊夫がやってのけた真相暴露

は、マスコミ・ジャーナリズムにほとんど反応を呼ばなかった。巨大企業東和自動車が、強力な根まわしをかけて、俊夫のアツピールを圧殺したのだ。

東和自動車と敵対関係にあるライバル・メーカーですら、関心をしめそうとしない。俊夫は理解に苦しんだ。絶好の反宣伝の材料としてとびついてくるという目算は完全にはずれた。

東和自動車は、ライバル・メーカーとも取引をすませていたのである。

俊夫の焦燥は深まった。レーサーとして再起するため、他の工場チームに口をかけても、ことごとく冷ややかな返事が戻ってくるだけだった。俊夫のカムバックに不信を持つというより、暴露戦術を使うような 仁義知らず のレーサーは、企業体として忌避するというのが真相のようであった。テストの機会すらあたえてくれないのだった。

「結局、おまえが悪あがきしたのが悪かったんだ。いい分は胸にしまっておいて、再起のチャンスをじっくり待てばよかった……」

俊夫に相談を持ちかけられた高名な先輩レーサーはいった。

「相手が悪かったな。大自動車メーカーと一介の若造レーサーとじゃ、喧嘩にもならねえ。タイガーと呼ばれてもてはやされるのも、絶頂のときだけだ。おまえもまだ若いし、そのうちまた芽が出るだろう。今度のことは、いい薬にな

ったと思つて辛抱するんだな」

身から出た錆だといわんばかりであつた。俊夫は足許が無限に崩壊する感覚を味わつた。他人を当てにしたおのれの甘さを苦く咬<sup>か</sup>みしめる。スター時代が華やかであればあるほど、他人はスターの没落を冷酷な喜びを持つて眺めるのだ。

俊夫は、経済的にもひどい苦境に立つことになつた。原宿の高級アパートに住むどころか、姉とふたりの食費にもこと欠くようになっていた。めぼしい家財はすべて売りはらつた。愛車のムスタングGTを手放した金も、あっさり右から左に消えた。それでも、未払いの病院代が残る始末だ。

由紀子のいうように、自動車工として急場をしのぎ、再起の機会を待つことは、一時代を画した、タイガー・レーサーの誇りが許さなかつた。

「四畳半のアパートでもいいじゃないの。最初からもう一度出直すのよ。なんだかあたし、さっぱりしちやつたわ」と、由紀子は、家財が消えたため、にわかになく空虚になつた室内を見まわしていった。

「生まれかわつたつもりでやりましょうよ。あたしも働くわ。なにかお仕事を見つけて」

だが、最初は決してゼロからの出発ではなかつた。俊夫が高校生のころ、町工場を経営していた両親が、交通事故で急死し、かなりの資産を残していったからである。

当時から車に憑かれ、レーサーになることを夢みていた俊夫が、五年後に念願を果したころには、その遺産の大部分が消えていたが、それは彼がひとりで使い果してしまつたようなものであつた。

夢が潰えたいまとなつては、由紀子に顔向けできない。不死身のように強健な弟にひきかえ、幼時から病身の由紀子は、労働に耐える体力を持つていなかった。

「姉さんには、俺の気持がわからないんだ」

俊夫は歯をくいしばつた。自責の念が、ナイフでえぐるように心を痛める。骨肉の裂ける肉体的苦痛には耐えられなくても、この辛さはどうにもならない。

カストロール・オイルと土埃つちぼこりにまみれ、ガソリンの芳香に酔つて、大馬力のモンスターマシンを駆り、栄光へ疾走する。それが俊夫の見果てぬ夢だ。その夢を追求することを断念するくらいなら、死んだ方がましである。かといつて、心臓を病む姉を働かせてまで、夢を追い続けることが、男としてどうしてできよう。

絶望のあまり、視界が狭まり、暗く絞られた。俊夫は、制止する姉の声を振り切つて部屋をとびだした。あてどもなく空虚な夜の中をさまよい歩く。松葉杖を捨てたばかりの左足へのいたわりも念頭がない。

いつしか、足はジャンジーラのアパートへ向つていた。ブラジル留学生のジャンジーラは、新宿須賀町のアパートに住んでいる。いまの俊夫には、ジャンジーラのしつと

りした浅黒い肌と甘ずっぱい果実の体臭に溺れることだけが、唯一の救いに思えた。尖った乳房の間に顔を埋めて、この底知れぬ失意を慰藉でみたすのだ……

だが、ジャンジラーのアパートの前へ行きついたとき、電撃に似たショックが身体を走った。

見覚えのあるアルファロメオGTVが、アパートの駐車場から滑りだしてきた。東和チームの元同僚河野の車であった。ナヴィゲーター・シートにはジャンジラーが喜々としてすわっていた。

河野は、チームきつての女漁りのプレイボーイで、かつて俊夫に混血児のジャンジラーの味加減を面白半分に訊き、殴られかけたことのある男であった。

ジャンジラーにまで見棄てられたのか……  
なにかが、俊夫の胸の中で音もなく断ち切られたようだった。

俊夫を手負いの野獣の狂気がとらえた。

夜の新宿で痛飲した俊夫は、予定の行動のように地まわりのヤクザと渡りあつた。

着痩せするため華奢に見える俊夫を侮つて、骨まで砕かれた相手は、過去数えきれないほどだ。高校時分は、一〇〇メートルを十秒台で走るスピードとずばぬけたスタミナを買われて、ボクシング部にスカウトされたこともある。が、あまりにも獰猛すぎるファイトを行なうため、お上品な高校ボクシングとは肌が合わなかった。世界チャンピオンを

二人も生みだした拳闘ジムに目をつけられたほどだが、一口になる気は毛頭なかった。車に魅了されていたからだ。すばらしい目と電光の反射神経は、レーシング・ドライヴアーとして生かしたかった……

溜まりきった破壊欲の排け口を見出した俊夫は、凄絶なほど目が据った。豹の目に似て黄色く底光りしてきた。一語も発さず黙りこくったまま、ヤクザどもに襲いかかった。恐ろしく凶暴な暴れ方であった。

数秒後には、ヤクザの大半が地上にのたうっていた。喧嘩慣れしているヤクザも、常人とは桁ちがいのスピードを持つ俊夫の動きにはついて行けない。ほとんどが睾丸を蹴りつぶされて苦悶の限りを尽している。残忍なベアナックルの強打を受けて破裂した目の水晶体を卵の白身のように流しだしている奴もいた。

泡食って短刀を抜いた最後のひとりは、俊夫の膝蹴りの強襲を胃にくった。前にのめったところを、俊夫が右手の手首と腕の付根を掴む。俊夫は膝を突きあげ、肘の関節にぶち当てて木の枝でもへし折るように粉碎した。

絶叫をあげてぶっ倒れた男の口に、狙い澄まして靴先を蹴こんだ。歯が残らず折れ砕けて、そいつの口は真赤な洞穴になった。

それでもなお、俊夫は攻撃をやめない。ジャンプして体重をかけ、首を踏みつける。俊夫はすでに人間の目をしていなかった。

殺意を露わにして、倒れたヤクザの頭を力いっぱい蹴りつつける。頭蓋骨は濡れた粘土のように無気味に軟かくなってきた。

だれかが呼んだパトカーのサイレンが、俊夫の顔に正気よみがえの表情を甦よみがえらせた。同時に恐ろしい敏捷びんしょうさで俊夫は逃げた。

警官の怒号をひきちぎって、路地から路地へ走り抜ける。火のような呼吸に肺胞を灼いて俊夫は疾走する。それは溶解した鉄の悔恨だ。

輝かしい栄光の未来は、永久に俊夫の前に閉された。彼は血まみれの人殺しであった。

夜の闇よりも更に暗い、暗黒の未来へと俊夫はまっしぐらに走りこんで行く。

## 第二章 生存試験

カリブ海は、南米大陸北岸のベネズエラ、キューバをはじめとする西インド諸島、中央アメリカに囲まれた大西洋の一海域だ。

この透明度の高い美しい海は、ハリケーンの発生地として有名だが、また、一九六二年、全世界を熱核戦争の悪夢に叩きこんだ「キューバ危機」を生んだ危険海域でもある。なぜなら、キューバのカストロ革命政権は、わずか二〇〇キロの海域を隔てて、北米の喉許に突きつけられた共産陣営の刃だからだ。

キューバがラテンアメリカにおける共産主義の拠点と化し、ソ連がキューバにミサイルを持ちこもうと企てたことから、地球全土を絶滅の恐怖に震撼しんかんさせた「キューバ危機」を招いたことは、衆知の事実である。

その島　ゾンビー島は、北米フロリダ半島から約二二〇キロ南方の海域に位置していた。七百の島で構成される英領バハマ諸島にも属さぬ孤島である。

南北二六マイル、東西一七マイルほどの小さな島だ。南東季節風の影響を受け、気候は亜熱帯性で、平均気温は二

十五度、年間を通じて変化がない。

表向きは無入島と登録されているが、実際には、住民人口千名を超える。小島には不似合なほど立派な飛行場と港を備えている。

大出力のレーダー・サイトも異様だ。

隣接したキューバのソ連製レーダー基地のスクリーンは、頻繁に離着陸する航空機の光点を<sup>フリック</sup>とらえ、付近海上を絶え間なくパトロールしている米海軍艦艇を、スweep・ラインに見出している。

しかし、スクリーンを監視しているキューバ陸軍のレーダー係は気にもとめない。レーダーを持ちこんできたロシア人たちが、気にしなくてもいいといったからだ。

アメ公どもは、そこではキューバの害になることはやっていないという。

ロシア人の言葉を裏書きするように、つい最近までカリブ海に潜入し、ゾンビー島の周辺をうろついていたソ連原潜も、姿を見せなくなっていた。

ロシア人は、アメ公となにやら秘密の取引を成立させたらしかった。

ゾンビー島の警戒心は異常に強く、島に接近することはまったく不可能だった。海空ともに禁を犯す者は、迅速な警告を受け、すみやかに退去させられた。

なぜなら、ゾンビー島には、公開をはばかる秘密キャンブが設けられていたからである。単なる軍事基地ではなか

った。ゾンビー島の特異な点は、死をもたらす奇怪な遊園地を持つことであつた。

たとえば、島西南部の亜熱帯密林がそれである。アマゾン奥地の緑の魔境をすら、はるかにしのぐ、地球上に類のない危険地帯なのだ。

田村俊夫は、一丁のハンティングナイフだけをあたえられ、密林をさまよつていた。

食料や水の携行は許されなかつたから、すべて自分ひとりの才覚で飢餓を満たし、生き伸びなければならぬのだつた。

うかつに密林の間を流れる河に水を求めれば、五メートル近い体長の南米産クロコダイルの貪欲な大口が待ち受けている。鰐を避ければ、獰猛な食肉鰻やピラニアの群れが襲つてくる。

密林には、スルククという三メートルを超す毒蛇やガラガラ蛇など数十種の猛毒蛇、毒蜘蛛、サソリ、吸血コウモリ、大蟻食い、豹など、いたるところに死が充満していた。

とくに恐ろしいと聞かされているのは、タマンドア・バディランテと呼ばれる大蟻食いだ。後脚で立って歩き、巨大な鉤爪のついた前脚で獲物を抱きすくめ、首筋から吸血する。一度抱えこまれると、猛獣も逃げられないという。

密林を脱出しようと試みる者には、徹底的な陥穽が待ち構えている。

底に鋭いスパイクを植えつけた落し穴、強力なアニマルトラップの類たぐいが、密林の境界線に張りめぐらされているのである。

密林を脱出しても、待っているのは、高さ五メートルの電流柵と機関銃だ。

海へ逃げれば、垂直にきりたった断崖が、天然の要害を固めている。さらにゾンビー島周囲の海中には、餌えづけされた凶暴なアオ鮫ざめやヨシキリ鮫の大群が遊ゆう弋よくし、哨兵しやうへいと死刑執行者の役割を務めているのだった。

これは、生存能力の試験なのである。落伍らくしは死に直結していた。四週間の密林生活を生き伸びた者だけが、合格する生存試験だ。

俊夫は、若木を切りとって作った長さ二メートルほどの槍やりを持ち歩いていた。獵刀で先端を削り、鋭く穂先を尖がらせてある。

武器として役立つほかに、利用法があった。足許の地面を探って行くことによつて、仕掛けられたアニマルトラップの類いをあばきだし、危険を避けることができる。

俊夫は、間断ない緊張を強いる生活のため、研ぎすまされた刃物を思わせる形相になっていた。削りとられたように類肉ほおにくが落ち、骨格が浮き出ている。目は硬く酷薄な光りをおびている。

昼間、樹上で類人猿のように営巢して眠り、夜は猛獣の

襲撃に備えて目を覚めていなければならぬ。豹オンサは木登りの名手なので、樹上においても油断ならぬのだ。

その日常が、俊夫に人間放れした鋭敏な知覚をもたらしていた。だから、うかうかと密林を歩きまわったりはしない。

毒蛇の危険もあるが、下生えに隠され、地上三〇センチほどの高さに、ほそい糸が張られていることがあるからだ。それを知らずに向うズネで切断しようものなら、付近に巧妙に仕掛けられた矢が飛来する。

いま、その罫のひとつを発見して、俊夫は白い強靱な歯をのぞかせた。

手槍をいっぱい伸ばし、下生えをかきわけて、張られているナイロン糸をひきちぎった。

シュツと空気を裂き、飛来した太い矢が俊夫の眼前で交差し、深々と地面に突き立つ。彼の身体がその場であれば、二本の矢は胴体を左右から貫いていただろう。

ナイロン糸がトリップワイヤーとなっており、隠された弓鉄砲のトリップガーを引く仕掛である。

見出したのは、熊くまをも倒す超強力型弓鉄砲であった。仕掛をとりはずしてみたが、手にあまった。鋼鉄製で重く巨大だ。強力な武器だが、携帯には不向きである。むろん、その点を考慮して、持ち運びを困難にしているのであろう。満身の力を渾めてさえ、弦を張るのに一苦労した。この大型弓鉄砲を自由に扱えるのは、成獣のマウンテン・ゴリ

ラぐらいなものだ。

弓鉄砲をひきずって行き、別の場所に仕掛けることにする。

この仕掛にかぎらず、野獣が罠にかからないことから判断すると、野獣の嫌う忌避剤シクロヘキシイミドが罠の周辺にふりまかれているのかもしれない。

嗅覚の発達した野獣は、あらかじめ警告を受けており、間抜けな人間だけが罠にかかるようになっていくのだ。

俊夫は、罠にやられた人間の死体をいくつも見かけていた。それもまともな形状をとどめたものではない。密林の死体処理屋に、あとかたもなく食い荒されていた。

川岸に出ると、ピラニアやカンジエロに襲われた人間の白骨が水中に沈んでいた。

が、もはやなにを見ようと、俊夫の心は反応しなくなっていた。いまは生存欲の化身であった。人間らしい心を持つていては、この殺人遊園地ではたちまち失格してしまう。弓鉄砲の仕掛を他に移動したのは、むろん理由あったことだ。忌避剤の予告のない獣道に罠をかけたのである。ペツカリーの一頭でも倒せば、十日やそこらは食いつなげるであろう。

間断ない餓えにさいなまれている身にとっては、五〇キロ近い重量を持つ仕掛の移動は大仕事であった。呼吸をはずませて、地面にうずくまり、めまいに耐える。まだ四週半ばも経過していないのだ。

あと二週間。それだけ生き伸びれば、十萬ドルが俊夫のものになる。再起に必要な十萬ドルが……

体力の回復を待つ間、俊夫の心はこの想像を絶した殺人遊園地に彼を連れこんだ運命を思い起こしていた。

絶望の果てに、夜の新宿で地まわりの暴力団を殺傷した俊夫を、得体の知れぬ男たちが拾いあげたのだった。彼らの申し出た条件は常識はずれのものだったが、警察に追われる身の俊夫に選択の余地はなかった。

海外の某有力秘密組織が、優秀な人材を求めているというのである。試験を受けるだけで、十萬ドルの報酬を出すという。試験にパスし、養成期間を経て、正式に採用が決めれば、欲するだけの高給が俊夫のものになるという。彼らは、かねてから俊夫の才能に目をつけ、接触の機会をうかがっていたのだと説明した。そのために、殺傷事件をひき起した俊夫の逃走を援助することができたという。

喉から手が出るほど金が欲しかったし、それにも増して、殺人罪で刑務所へぶちこまれるのはまっぴらであった。相手がマフィアであろうとCIAであろうとかまわない。十萬ドルが手に入り、国外脱出に手をかしてくれろというのであれば、いなやはなかった。二千ドルの内金をもらって、俊夫は身売りを承諾したのだ。金を日本円でもらい、姉の由紀子に郵送すると、俊夫は身柄を彼らにあずけたのだった。

俊夫を買いとった 秘密組織 は、とほうもない実力を

持っていた。俊夫はフィンカム基地から米軍用機で、国外へひそかに運びだされたのである。そんな芸当ができるのは、悪名高いCIAを置いて他にないであろう。

しかし、俊夫の輸送にあたった私服の米人たちは、彼のいかなる質問にも沈黙で応じた。最初に俊夫と接触した日本人らも詳しい説明を避けたから、彼はほとんど予備知識なしでアラスカへ送られたのだ。その空軍基地内で身体検査と知能テストを受けたあと、カリブ海のゾンビー島に向ったのだった。

島の秘密キャンプには、要員と米軍の制服を着た警備隊のほかにも、数百名の民間人が集められていた。人種・国籍も種々雑多で、それぞれの経歴も軍人から職業的犯罪者にいたるまでおよそとりとめもなかった。共通点といえるのは、いずれも比較的年齢が若く、健康であるという以上は肉体的に強靱であり、選抜試験を受けるために集められたということであった。

被験者に、明らかに暴力犯罪者タイプの人間が多数を占めているのが異様だったが、俊夫は試験を受けることに異存はなかった。どうせ法律の外に踏みだしてしまった身である。この先どんなことになるかと、刑務所暮らしよりはましだと思った。レーサーとして再起する資金を稼ぐためなら、特務工作員になってもいい。

だが、俊夫はその考えの甘さをただちに骨身にしみて思い知らされることになった。選抜試験はそれほど生易しい

ものではなかったのである。

数百名の被験者とともに、ゾンビー島の人工密林へ追いかまれて、一時間とたたぬうちに、俊夫はそこが悪魔じみたサデイストの入念に設計した生地獄だと知った……

俊夫はさらに落とし穴を発見した。

その部分だけ泥が軟かくなっていて、槍の穂先が深く食いこむので、それとわかった。

キャンプに近い密林の境界線あたりは、危険な食肉獣が少ないかわりに、罠がむやみに多いのである。

俊夫は、落とし穴を用心深く迂回うかいした。充分な注意を怠らなければ、罠はこわくない。恐ろしいのは、音もなく襲ってくる豹オンサである。オンサと呼ばれる南米産のジャガーは、アフリカ産の豹よりかなり巨大な体躯たいくを持つ。この島に放されたオンサは、完全な人食いだ。

食肉獣の刺激的な臭気を嗅いだのは、落とし穴を迂回した直後であった。タバコを断っているのと、原始人の生活が、俊夫の知覚を鋭敏にしていた。

俊夫は手製の槍を構え凝固した。樹上によじ登って難を避ける余裕がないと直感したのだ。それにオンサは木登りが達者である。地上で槍を得物に闘ったほうがまだましだが、茂みを押しわけて出現した相手は、俊夫の予想を完全に裏切った。

虎とらだったのである！ 巨体を誇るベンガル虎、全長四メ

ーター体重三〇〇キロを超えるであろう。ライオンに匹敵し、南米産ジャガーの三倍のスケールを持つ超大物だ。人工密林の支配者であろう。化物じみていた。

俊夫の頭髪は逆立ち、目は真円に近いほどまろくなつた。チヤチな手製の槍で歯が立つ相手ではない。文字通りの死神だ。

虎にとっては、明らかに出会いがしらだったらしい。水を求めて風下へ歩いてきたため、俊夫の匂いに気づかなかつたのであろう。

虎は威嚇の唸りをあげ、長い尾を鞭むちのように烈はげしく、びゅつびゅつと左右に打ち振つた。緑色の恐ろしい目が、瞬きもせず俊夫に挑みかかった。

人食マンイーターいであることは疑う余地もない。人間に対する警戒心は一片もなく、貪欲な表情だけが際立っていた。この密林のすべての生物は虎の餌食えじきなのだ。無力な人間ほど手軽な獲物はまたとあるまい。

俊夫の顔に脂汗が噴きだした。鼓動が狂つたようにドツドツと胸郭を乱打する。逃走したい衝動をけんめいにねじ伏せる。逃げようと闘こおうと結果は同じだ。ひとたまりもなく咬み倒される。狡智こうちだけが彼の生命を救うのだ。

俊夫は槍を突きだし、喊声かんせいをあげて虎を挑発しにかかった。虎は人間の手指ほどもある物凄い鉤爪のうわつた前肢をあげて応酬する。

虎を挑発し見さかいをなくさせるのが、俊夫の狙いであ

った。落し穴は彼の背後五メートルの足許に潜んでいる。虎を興奮させることによって、唯一の活路が開ける。

俊夫は虎の目を狙って槍をくりだした。その動作にあわせて小刻みに後退する。

虎の怒りは急速に昂<sup>たか</sup>まった。しゃつと唾を吐きちらし、目を突いてくるこうるさい槍を恐ろしい大顎<sup>あご</sup>の間で無造作に咬み折った。

俊夫は槍を放して後退しながら獵刀を腰の革鞘から抜きとる。同時に鋼鉄のスプリングを蔵したような虎の巨体が宙に舞った。俊夫の両足が落し穴の縁の軟かい泥に吸いこまれたのはそのときだ。彼は力いっぱい右手の獵刀を地表に突きたて、落し穴のへりにしがみついた。

突如目標を見失った虎は、俊夫の頭上を躍り超え、まとも<sup>まとも</sup>に落し穴へ跳びこんでしまった。表面の泥土とともに落下し、穴底の長いスパイクにみずからの巨大な体重でおのが身を縫い止める無気味な音が立ちのぼった。

地面に柄の部分まで刺しこまれた獵刀は、衝撃に耐え俊夫の体重を支えていた。もし刃が折れていたら、彼も虎と運命をともしにしていたであろう。

穴底では、虎が苦悶に咆<sup>ほ</sup>え狂っていた。激怒に駆られて、鉄のスパイクにガチガチ咬みつき、荒れ狂っている。スパイクを咬み折る壮絶さであった。だが、全身を十数箇所も貫通したスパイクから逃れることは不可能だ。

俊夫は獵刀をたよりにじりじりと身をひきあげ、地表に

這いあがった。泥まみれの手で額の汗をこする。心臓は割れかえるばかりに轟とどろき、全身冷汗にまみれていたが、凍りついたような顔は無表情であった。穴の傍にしゃがみこんで、虎が絶命するのを待ちかまえた。

今度は、虎が俊夫の胃袋におさまる番だ。

\*

一週間ほどを、虎の死骸を食って生命をつないだ俊夫は、半ダースほどのハイエナの群れと遭遇した。

新大陸にハイエナは分布していないから、ベンガル虎同様運びこまれ、人工密林に放されたのであろう。

腐肉獣どもは興奮いきえしきって、笑声に似た奇声を発して騒ぎたてていた。生餌いきえを発見したのだ。連中の餌えさになろうとしているのは、アニマル・トラップに両足首を咬まれた人間であつた。

若い女である。アラブ系の浅黒い肌、暗色の髪と瞳を持った美しい女だ。激痛に歪んだ顔は涙と脂汗で汚れていたが、歯をくいしばってハンティング・ナイフを構え、野獣の接近を阻んでいた。

腐肉獣の群れは、アラブ女を包囲して、けたたましい笑声をたて跳びはね踊りくるっている。犠牲いけにえを前にした狂喜乱舞だ。

ハイエナは、密林の卑しい屍食者として知られ蔑さげすまれているが、時として臆病きわまる残飯漁りのイメージをかなぐり捨て、ライオンや豹などの大敵をなぶり殺しにすることもある無気味な存在である。

若い女の武器は、ハンティング・ナイフよりもむしろ、その鋭い気迫だった。眼光に異常な力があり、それが野獣に襲撃を躊躇ちゅうちゅうさせているのだった。

対決はいつ果てるともなく続いていたが、それも時間の問題といえた。ハイエナは、習性からいつて獲物に執着心が強い。女が出血と飢餓と疲労で気力を失うまで待つであろう。

すでに腐肉獣どもは横柄にふるまいはじめていた。女に動作の自由がないことを悟ったのだ。けたたましく喚きたてながら、ちよつかいを出すふりをし、突きだされるナイフの刃先を避け、身軽に跳びさる。女の眼前で、軽蔑をこめて尾をもたげ、コテコテと糞くそをひりだす奴もいた。

風下のブッシュの蔭かげから、その光景を、俊夫は無表情に眺めた。べつに女の危機を救ってやるうという気も起きない。この死の密林に棲すむものは、人獣を問わず敵だからだ。俊夫は人影を見かけしだい、用心深く避けてきた。襲われる危険があるためだ。この極度に苛烈かれつな環境下では、人が人を食うことさえありうる。人間は、ひよっとすると最悪の敵かもしれない。

俊夫は、罨とらに捉えられた女が、左手に抱えこんだ赤黒い

塊を見分けて、はじめてわずかに表情を動かした。なんの肉かわからないが、骨つきの肉塊だ。三キログラムはありそうだった。

彼は空腹なのだ。三〇〇キロを越すベンガル虎の死骸は、三日後には猛烈な悪臭を放つ腐肉と化してしまった。獲物の内臓を抜いて、肉を保存する方法を知らなかったからだ。ちよつとした知識不足から、彼は巨大な蛋白質源<sup>たんぱく</sup>を棒に振ってしまったのだった。

俊夫は、女の手の肉塊につられて行動した。槍を構えてブツシュからとびだす。槍の尖端は、穴の底のスパイクからはずした鋼鉄の穂先で武装してある。

ハイエナどもは警戒の鳴き声をあげて、騒然となった。とつさに迎撃か逃走かを決断しかねて右往左往する。それでも貪欲な表情は変らない。俊夫は突進し、槍を走らせた。槍先が一匹の胴体を浅くえぐる。悲鳴が湧いて縞<sup>しま</sup>を持つ野獣どもが飛び散った。あわてふためき潰走<sup>かいそう</sup>する。瞬く間に一匹残らず消え失せてしまった。

しかし、遠くへは行かず、俊夫が立ち去るのを待って、物蔭で物欲しげな目を光らせているだろう。

俊夫はまず槍の穂先を調べた。少量の血と獣毛が附着している。切味が悪いので、深傷を負わせるのは困難だ。

検分を終えてから、はじめて罨にかかった女と視線を合わせた。

女の目は、刺すような敵意と警戒心でとげとげしかった。

感謝の色などまったくない。

対する俊夫の目も、いささかの柔<sup>やわらか</sup>みもなかった。硬玉  
みたいに非情な光をおびていた。

女の両足首には、頑丈な虎挟みの、ギザギザを持った鋼  
鉄の歯が、がっぷりと咬みついていた。肉を裂いて骨に達  
しているであろう。黒く凝固した血が畏にべっとりこびり  
ついている。

爆<sup>は</sup>ぜた傷口の周囲の肉は、無気味な緑色にふくれあがっ  
ていた。手当を急がないと、壊<sup>え</sup>疽<sup>そ</sup>を起して両足を切断しな  
ければならなくなる。

耐えがたい激痛に見舞われているはずだが、女は苦悶の  
呻きひとつ漏らさない。恐ろしいほどの自制力だ。

俊夫は再び、女の手の中の肉塊に目を吸い寄せられた。  
熾<sup>つ</sup>烈な欲望が疼<sup>うず</sup>き、思わず顔をしかめる。握<sup>こ</sup>り拳<sup>こぶし</sup>みたい  
に固く収縮していた胃袋が、ちぎられるような痛みをとも  
なつて、猛然とうごめきだしたからだ。

女は、肉を奪われるのを警戒して、ハンティング・ナイ  
フの切先を俊夫に向けた。

俊夫の目が冷酷なものになった。意識せずに槍を握り直  
す。その気配をすばやく女は見てとった。

「わかつたわ。肉をあげる……そのかわりこの畏をはずす  
のを手伝って……」

しゃがれ声でいった。屈伏の目の色だ。

二週間以上も、人声を耳にせず死の密林生活を送ってきた

た俊夫に、女の声は異様に響いた。何十年も孤独を続けたあげく、言葉というものを忘れてしまったかのようだ。

俊夫は奇妙な愕おどろきの表情になった。レーザー時代、海外遠征で英語には慣れていているが、にわかには頭が働かない。

女は、肉塊を俊夫に投げてよこした。反射的に受けとめ、女を注視しながらゆっくり口許に運び、かぶりつく。

汁気の多い腐りかけた肉を、白い強靱な歯で咬み裂き、喉の奥へ送りこむ間も、目を女からはなさない。

女は苦痛の鋭い呻き声をたてながら、トラップのネジを、ナイフの峰を用いて、はずしにかかった。思うにまかせず、泣き叫ぶ調子に声が高まる。

「手を貸して。お願い！」

絶望にとらわれた女が、哀れな歪んだ顔を俊夫にふりむける。涙をとめどもなく流している。

俊夫は休みなく顎の咀嚼そしゃく運動に専念していた。手を出そうともせず、平然と女の哀願を眺めた。無感動な傍観者の目つきだ。

女は歯ぎしりした。文字通り血を流す苦闘を続ける。ようやくトラップのラッチを解き、死物狂いの努力をはらつて、強力なスプリングを押し縮め罠の歯をこじあげた。女とは思えぬほどの体力だ。

足首を抜くとき傷口が破れ、新たな血を噴いて、手を真赤に濡らした。

トラップから抜けても、女は立ちあがれなかった。顔色

はまったく血の気がない。鋼鉄の歯に骨まで咬み砕かれたのかもしれない。

そのころには、俊夫は肉塊を骨だけ残してあらかた胃袋に収めてしまっていた。大腿骨だいたいこつにこびりついた肉片をこそげとり、ナイフで骨を割って髓をほじくりだしている。

「お願いだから手を貸して。ここから連れて行って」  
弱々しく哀願する。

「またあの獣たちが戻ってくる！ 連れて行って、お願い……」

女は効かない両脚をひきずり、手で地面を掻いて俊夫に這い寄った。

「なんでもあげる。なんでもいう通りにするから、あたしをここに置いて行かないで」

必死であった。手を伸ばして俊夫の足首を掴もうとする。俊夫はひよいと後退あとずさって女の手を避けた。黙々と顎を動かしながら、骨の破片を投げすてる。ナイフを鞘に収める。

耳のないような顔をしていた。女の哀願には無関心だ。重傷を負って歩行不能の女を背負いこむ気はまったくない。それだけ俊夫自身の生き伸びる機会が少なくなる。

女は最後の望みを、自分の肉体の魅力に托そうと試みた。慄える指先をデニムの作業服の胸許にかけた。一気にボタンをひきちぎる。吊鐘つりがね型のみごとな隆起がむきだしになった。ひきつった笑顔で俊夫を見つめた。顔にも乳房の間にも、汗が珠たまになつて溜まっている。緊張で全身がわななく。

鼻翼がぴくつき、色あせた唇が慄える。

俊夫の非情な顔は微動もしなかった。女の懸命な媚態びたいを無視して背を向けた。そのまま立ち去ろうとする。

背後で鋭いアラブ語の絶叫があがった。振り向いた俊夫は、火のように憎悪にきらめく瞳と、ナイフの刃先を把つかんだ右手がそりかえるのを見た。大気を咬み、銀条が彼の胸板へ向って伸びてくる。

素速く正確無比な投法だったが、俊夫の反応はさらに迅速であった。胸に吸いこまれるようなナイフを避けて仰向けに身を倒す。ナイフは虚しく密林に消えた。樹幹に突き刺さる音が響いた。

女はがつくりと頭を垂れた。しんそこからの絶望にとらわれていた。歩けぬ上に、唯一の武器を失ってしまったのは、この先、生き伸びる望みはまったくない。

俊夫は、地表から身を起こすと、いくらか戸惑ったように、うなだれた女を見つめた。きびすを返すと、背後の密林に歩み去る。

しばらくして、俊夫が木の枝を手にひき返してきたとき、女の顔には不信の表情さえ浮かんだ。よほど意外だったらしい。声もなく、ただ一心に目をみはる。

俊夫は手早く枝葉をナイフで払い落とし、まっすぐな杖をこしらえた。無言で、それを女の前にほふる。女はためらいがちに、おずおずと手を伸ばし、即席の杖を拾いあげた。「なぜ、助ける……」

女はしゃがれ声で呟くようにいった。

「あたしは、おまえを殺そうとしたのに」

俊夫はしかめ面をした。思考が錆びついてしまったように、英語をつづりにくい。むっつりとナイフを革鞘にさしこんだ。

「知るもんか……」

と干からびた声を投げすてる。

\*

緊張から解放された女は、ぶっ通しに二十四時間以上眠り続けた。

俊夫が見つけた三〇平方メートルほどの広さの岩穴である。前に俊夫の殺した虎が棲んでいたと見えて、いまだに虎の鋭い刺激的な臭気が残っている。そのためか、害獣は近寄らない。

昏睡こんすいを続ける女は、高熱を発し、おびただしく発汗した。しかし、傷口を消毒する薬品も抗生物質もないから、放置しておくほかはなかった。細菌を濾過ろかしない河水は更に危険なので、傷口を洗うこともできない。

女の呼吸は浅く早かったが、心臓音は確実なリズムを刻んでいた。よほど強靱な心臓に恵まれているのである。

翌々日になってから目をさました女は、しきりに喉の乾きを訴えた。デニムのシャツに含ませた水を唇にしたたら

せてやると、もどかしがって、赤ん坊みたいに舌を鳴らした。

傷口に肉芽が盛り上がり、ピンク色の薄皮が張っていた。気がかりだった壞疽も起こさない。土気色を呈していた顔色もよくなり、皮膚にも艶が戻っていた。

その次の日には、杖をついて岩穴の外に、用を足しに出られるまでに回復した。めざましい生命力であった。げっそり痩せこけて、肋骨が浮きだしてしまっただが、一種独特の精気の持主だ。

その間、俊夫と女は、ほとんど会話を交わさなかった。狩猟と見張りで精力をすり減らしている俊夫は、身近に裸体に等しい女を見ても、なんの感興も湧かない。あまりにも苛酷な状況が、心を麻痺させてしまっていた。女に対して、野獣の番ほどの結びつきすら感じなかった。

しかし、数日後、杖なしで走りまわれるほどになった女は、俊夫の有能なパートナーの位置を占めた。驚くほどタフな上に敏捷だ。ほっそりした外見からは、とうてい信じられぬほどの精悍さを発揮した。その上、アラブ人だけあって、ナイフ使いの名手だ。

俊夫が、獣道に仕掛けておいたボウガンの罠にペツカリがかかったとき、女は真価を発揮した。

ペツカリは、イノシシに似た気性の荒い雑食の野獣だ。アメリカ豹と呼ばれる南米のジャガーですら手を焼くほどだ。時には逆に食われることすらある。

大物獵用の矢を横腹に深く突き立てても屈せず、ペツカリは追跡する俊夫に猛烈な逆襲を加えた。上向きにそつた鋭い牙が、面食らつて跳びのく俊夫のふくらはぎを浅く切り裂いた。

そこで女がハンティング・ナイフを閃かせ、鮮やかにペツカリの喉を斬つたのだ。ペツカリはもんどりうつて倒れ、四肢を痙攣させた。

女は巧みな手さばきで、ペツカリの内臓を抜いた。だいたいにおいて、アラブ人は獣の屠殺に熟達しているのだ。俊夫は目をまるくして眺めていた。

四肢の先を蔓で縛つたペツカリを背負つて運ぶのは俊夫の役目である。内臓を抜いても優に六〇キロを越す重みを受け、呻く俊夫を見て、女ははじめて笑つた。

ペツカリを運び、岩穴の寝ぐらに戻つたふたりを、三人組の男たちが待つていた。獲物を横奪りに来たのだ。他人が苦勞して手に入れた食物を、力づくで召しあげようというのだった。

三人とも白人で、いずれ劣らぬ凶悪な面相をしていた。棍棒と獵刀で武装している。だれから奪つたのか、ひとりで三丁もナイフを腰に吊っている奴もいる。

俊夫はペツカリの死骸を投げだし、すばやく槍を構えた。女はハンティング・ナイフを革鞘から抜く。

三対二で、しかも相手のひとりには女だ……三人組は衆を頼んで自信満々であつた。荒くれ男ぞろいの上に、そのう

ちのひとりには、身長二メートルを越すプロレスラー並みの巨漢だ。ひくま 熊みたいな体格をして、おうし 牡牛を撲殺できる棍棒を掴んでいる。

身長一メートル七六センチの上背を持つ俊夫も、体格では著しく見劣りした。巨漢とは、ライオンと豹ほどの圧倒的な差がある。

三人組は、獰猛に歯を剥きだして迫ってきた。威嚇だけで、俊夫があっさり獲物を放棄して逃走すると思っっているのだらう。

「女を殺るなよ」

と、黄色い薄汚い髭で顔中を埋めた奴がいった。

「女にはあとで用があるからな」

「逃がしやしねえよ」

と、両眼の間隔が極度に狭い、卑しい犬を想わせる顔つきの男が 応じた。貪欲そうに舌なめずりをし、早くも腰の前部を隆々と突起させている。俊夫が抵抗するとは思ってもないらしい。

熊並みの巨大漢は、小さい目にガラスの虚ろな光をたたえていた。白痴的だが、それだけに無気味だ。

俊夫の目は暗く険しく燃えた。豹の目になった。

そのとき、三人組が背にした岩山のおおかみ のてっぺんに、もうひとり、ひよっこりと顔を出した。狼のおおかみ みたいに身軽な身のこなしで、岩山の頂きに跳びあがる。手足のひよろりと長い瘦せた男である。東洋人らしい。気配を感じとって、三

人組も急いで振りかえる。

「そこのお若いの、どうだね？」

と、新顔の東洋人は、俊夫に向って達者な日本語で話しかけた。

「突然でなんだが、俺が入るとちようど三対三で、うまくバランスがとれるんだがな」

取引を申し出ようというのである。奇態な笑顔を見せて続ける。

「どうだ？ この俺をチームに入れてみないかね？ まんざら損な取引じゃないと思うんだがね」

俊夫は無言で、荒々しく唾を吐きすてた。それが返事だ。痩せ狼みたいな東洋人は、目尻にしわを寄せて笑った。

「ほんじゃま、やってくれ。手が要るときには、いつでも声をかけなよ。それまで高処たかみの見物といくからな」

背をまるめて岩山のとつぺんにすわりこみ、尖った顎を両掌で支えた。のんびりと見物にとりかかる。

強盗三人組は緊張を解いた。腹背に敵を受けずにすんだことを知って、消えていた獰猛な笑いが甦ってくる。

俊夫と女は、暗黙のうちにそれぞれ敵を分担した。俊夫は巨大漢を、女は残る二人を相手どる。

棍棒に対する槍は有利と思われた。マサイ族の勇猛な戦士は、槍だけでライオンを殺す。巨大漢の動きはみるからに鈍重である。槍が的をはずすはずはなかった。

終始沈黙をまもりつづけていた俊夫の口から、はじめて

鋭い絶叫が奔った。突進しざま槍を走らせる。穂先は巨大漢の脇腹を深々と刺した。

だが、こいつはとほうもない不死身だったのである。巨躯をわずかに震わせると、やにわに槍を俊夫の手からもぎとった。腹に風穴があいたのに、なにも感じないらしい。

俊夫は、思わぬ誤算にまごつきながら獵刀を抜いた。巨大漢を手早く刺殺し、女を掩護する目算がはずれてしまった。

が、女に掩護は無用とわかった。そのナイフさばきは、ほとんど芸術の域に達していたからだ。あらゆる角度から自由自在に刃を閃かせ、ふたりの男を圧倒していた。黄色髭は笑いも消しとび、めまぐるしいナイフ攻撃に追いつめられてしまった。上体を瞬く間に十数か所も切り裂かれ、血に染んで、恐怖と苦痛に顔を歪めた。悲鳴まじりに、相棒に助けを求める。

しかし、両眼のくつついたような相棒は、機敏に逃げだそうとしていた。行きがけの駄賃にペツカリーをかつぎ、よろめきながら逃走しようとする。

高処の見物をきめこんでいた東洋人が怒鳴って石礫を投げつけた。みごとに泥棒の後頭部に命中し、はねかえる。泥棒は獲物もろともひっくりかえり、這うようにして逃げ去る。

一方、女は鮮やかに、黄色髭の頸動脈けいどうみやくを切断したところだった。喉がぱっくり割れて、声帯まで露出した。血が

異様な音をたてて二メートルも噴出する。女はすばやく横に跳んで血しぶきを避けた。

俊夫も豹の動きで襲いかかり、巨大漢の盛りあがった肩口に、獵刀を深々とさしこんだ。が、この化物は、苦痛感覚というものを持ちあわせていないらしい。猛烈な巨体の一揺りで俊夫を振り飛ばしてしまった。左肩に獵刀の柄をよつきり生やしたまま、目に空虚な光をたたえて襲いかかってくる。粘土製の巨人ゴーレムみたいにタフだ。

俊夫は身を転がして、唸りをあげ振りおろされる棍棒の強打を避けた。足をはねあげ、化物の股間を蹴あげても、ビクともしない。

巨大漢の背後から、獵刀を構えた女が体当たりした。背中にハンティング・ナイフが柄まで埋りこんだ。

巨大漢は凄まじく咆えた。ナイフをこじりまわす女を、巨体の一揺りで軽々とはねとばしてしまう。

依然として参った気配はない。歯が立たぬと知って、俊夫と女は喘ぎながら後退した。

巨大漢は、岩に似た無感動な顔で、逃げ腰のふたりを凝視した。小さな冷たい目に満足の色を浮かべた。

ペツカリーの死骸を拾いあげ、無造作に片手でぶらさげる。実にとほうもない腕力である。自分の身体につき刺さっている二本の獵刀を気にもとめないようだ。神経の具合がどうかしていると思えない。

「どうするんだ？ そろそろお呼びがかかってもいいころ

じゃないかね？」

と、岩山のてっぺんから、痩せこけた東洋人が声をかけた。

「せっかくの獲物を持っていかれちまうぜ」

「勝手にしろ」

俊夫は吐きすてるようにいった。手も足も出ない敗北感で目の前が暗くなっていた。まったく手に負えないのだからしかたがない。

「では、お許しの出たところで、ひとつ試してみるかね」  
痩せた男は、悠々と岩山の頂きからとびおりてきた。四メーターの高さを苦にもせず、さながら体重を持たないかのような身ごなしであった。

( 続きは正式版でお楽しみください )

e 文庫 <http://www.ebunko.ne.jp/>

ゾンビ・ハンター  
死霊狩り1 デジタル立ち読み版

発行日 2000年12月1日

著者 平井和正

イラスト 生頼範義

デザイン 伸童舎

発行 有限会社ルナテック

〒125 0041

東京都葛飾区東金町3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI, NORIYOSHI OHRAI,  
LUNATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。